

平成23年度 科学・技術関係予算概算要求 個別施策ヒアリング  
24009 特別奨励研究員事業（文部科学省）

- 1 日時：平成22年9月7日（火） 11：30～12：00
- 2 場所：内閣府（合同庁舎4号館）1202共用会議室
- 3 聴取者：総合科学技術会議有識者議員 相澤議員、本庶議員、奥村議員、  
今栄議員  
外部専門家 5名（うち若手 2名）  
内閣府 岩瀬審議官、有松参事官
- 4 説明者：科学技術・学術政策局基盤政策課 猪股人材政策企画官

5 施策概要

世界に先駆ける卓越した研究業績を生み出すことが期待される特に優れた若手研究者が、自らが希望する大学・公的研究機関等において主体的に研究に専念できるよう「特別奨励研究員」として選拔し、「特別奨励金」を給付する。

6 質疑応答模様

- （相澤議員）特別奨励研究員というのは、単なるポストの延長というようにしか理解しにくいですが、如何か。どこにインセンティブがあるのか。
- （文部科学省）インセンティブとしては、1,000万円を前もって一括で支給することができることと、自ら希望する、大学や研究機関で自らがやりたい研究に没頭できるような環境を提供できる場所があります。また、ポストの延長ではないかとの質問については、このような事業を活用して輝かしい成果をあげて、大学の准教授ポストに就く、またはテニユアトラックに入る前段階のキャリアパスの一つとして制度設計を考えておりまして、ドクター終了後の10年間としていますのは、現在の国立大学の准教授の新規採用の平均年齢が39歳になっているというデータがあります。日本学術振興会のPDの制度は3年なので31～2歳で終わってしまうが、そこで自由な研究をしたい卓越した研究者にこのような場を用意して海外、国内の好きなところで研究成果をあげて頂くこととしています。ただ、32人という限られた人数ですが実施していきたいと考えています。
- （相澤議員）若い人たちを対象にするのであれば解るが、10年というとならば准教授になって更にこの事業が入ってくると、若者の将来に対する夢にどう結びつくのか解らない。この事業で一生懸命がんばるチャンスを与えるということか。
- （文部科学省）人によってはいろいろあると思うが、例えばPD（特別研究員）

を先にとってその後この事業を受けるというイメージを持っているかもしれませんが、ドクターを取った非常に優秀な者はこちらにアプライすることもできるので、ドクターを取ってすぐの方にとっては、3ランクの研究に従事できることをイメージして頂ければと思います。この事業が1,000万円で、SPDやPDは若干下がっておりますので、こちらが金額としては高くなっております。

(相澤議員) 博士号を取って10年ポスドクでいることが不自然。CSTPとしても、以前、ポスドクは博士号取得後5年以内に区切るべき、と提言したことがある。ポスドクの年齢層が広がってきていること自体が健全ではない。常にそれが新しい問題を引き起こしているので質問している。

(文部科学省) 本当に優秀な者は、JSPSのPDやSPDではなくこちらに採用されることを念頭に置いて、若い段階から1,000万円の奨励金を受けられることができるチャンスを与える事業であります。ポスドクを長引かせようとする意図ではなく、若手研究者によりよい奨励金を支給したいという意図をご理解頂ければと思います。

(外部専門家) PDとの違いは1,000万円一括で渡されて給与や研究費を支払うことが違うのか。

(文部科学省) SPDは毎月振り込まれるが、本事業は4月より早い段階に一括で振り込まれることになります。

(外部専門家) 若い人たちにとってそれにメリットは感じないのではないかとされる。やはり自分のキャリアパスに不安を持っているので、安定したところに魅力を感じるので、これは不安定に思われる。これをテニュアトラックとカップリングする発想はないのか。

(文部科学省) テニュアトラックに入る前に、本事業で輝かしい成績を挙げて頂いてテニュアトラックに入ることは可能です。

(外部専門家) 若い人でも35歳とすると、テニュアトラックに入って40歳になる。最初からテニュアトラックを持っている人に1,000万円の奨励金は解るが、別にすると若い人にとって魅力的かどうか疑問がある。

(文部科学省) テニュアトラックと本事業のカップリングについては、PDは、任期付教員やテニュアになると支給がストップされる制度になっているが、新しい制度なので平行で受けられるかどうか検討してみたいと思います。

(外部専門家) 年間32人の設定は。

(文部科学省) 8領域をそれぞれ4人ずつで考えています。人数は少ないですが、非常に優れた権威あるものにしたいと思っています。

(奥村議員) この事業でどういう政策課題を解決したいのか。プログラムの達成目標は。

(文部科学省) トップクラスの若手研究者が希望する場所で自分のやりたいと

思っている基礎研究を極めて頂いて、優れた研究業績を若いうちに上げていただく方を十分な人数ではないかもしれませんが、既存のS P DやP Dよりも優遇した形で育成するものです。若手研究者の研究環境の整備と育成が大きな目標です。

(奥村議員)能力はあるが、研究環境が悪くて能力が発揮できていない者がかなり居るといった問題意識か。

(文部科学省)若手研究者が将来に夢を持ってない、自立した研究環境が乏しいという問題意識を持っており、様々な新規の施策を用意しパッケージとして若手研究者の支援特別枠という形でコンテストに出したいと考えております。その中の施策の一つであり、日本の成長を引っ張っていく若手研究者を育成する全体のパッケージの一つで、その中にはテニユアトラックもありP Dも入っています。

(外部専門家)それぞれ細切れで体系的になっていない、施策が別々に見える。それと、予算総額が5億円弱で事務費が2億以上はどのように使われるのか。

(文部科学省)事務費はシステム作りに充てる経費を積算しています。

(外部専門家)テニユアトラックと連動させればこの経費はいらんと思われ。

(文部科学省)システム開発は初年度限りで2年目からはありません。

(若手研究者)安定を求めるのは成功した人の言葉で、成功していない若い人たちはパーマネントポストとかではなくて、自分が今研究したいことをして悔いのない人生を送りたいと思っているのでこれは良い施策だと思います。聞きたいことは、例えば特任教員として認められるのか、P Dの場合は特任教員になれないので、緩和しないと駄目だと思います。

(文部科学省)このシステムの制度設計については、テニユアトラック教員と同じような論点でありますので検討させて頂きたいと思います。

(本庶議員)基本的に基礎WGで提案したように、若い人を採用して給与と研究費を付けて、全国の大学でお見合いをしているところに行ってもらおうという形にすれば、大学側も給与付きで来てくれるし、トップレベルのお墨付きをもらったのだから、分野が合えば採用したいと思うはずである。ちょっと制度設計を考えるべきである。今のテニユアトラックのご提案では、300万円の間接経費しかこないのは大学側のインセンティブがやや弱い。

(相澤議員)このプログラムの特徴が見えない。他の制度と仕分けしながら明確にして欲しい。

以上